



TITLE:

天文教育：『星界學習後の感想記』 の感想

AUTHOR(S):

水野, 千里

CITATION:

水野, 千里. 天文教育：『星界學習後の感想記』の感想. 天界 1934,
14(160): 393-396

ISSUE DATE:

1934-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166853>

RIGHT:

天 文 教 育

『星界學習後の感想記』の感想

關西中學
水 野 千 里

去る五年度から筆答考査が私の學校で復活された。余の答案考査の態度は、一言にしてこれを盡せば戦々兢兢として、これに臨むものである。拙い答案に接する毎に、余の教授が徹底して居なかつたことを證明せられるからだ。年々教授法に工夫を凝らし、前年の失敗を繰返へさない様に努力するが、それでも成績不良の者を出し實に汗顔の至りである。第五學年に一學期間かゝつて、星界を教授したが、第四學年迄の地理とは、その趣を異にするので、生徒諸子も勝手が違つて、苦勞せられた様だ。四問の内、最後の問は「星界學習後の感想を記せ」といふ題であつた。この問題で賞められたり、クサされたり、お小言を頂戴したり、種々雑多であつた。今その二三を記して、余の感想を記さう。

一、今迄別に理論的な事を考へる事なくして只平々凡々として、晴夜に眺めて居た無数の星が、いかに我々人生に大なる影響をして居るか、例へば、我々日常の時計如きも、皆天文學より割り出し、それよりもなほ航海者の唯一の生命である、方角の如きも、彼の北極星によりて、晴夜に方角を知る事が出来、又是等の測定には、いかに高等數學の力を應用せねば解決することが出来ないかを知り、數學もかくの如きに應用されて、初めて價値

あるものである事を痛切に感じた。そして自然界にとゞまらず宇宙迄も、人間は征服し、これを日常に應用して居る事を思へば、今さら人間の知識の大なる事に驚嘆せざるを得ない。(S.K生)

これは眞面目な答案だ。生徒諸子がこの様に理解して呉れれば満足する。さすがS.K君は秀才だ。勉強家だ。それが星界讚美の秀逸である。

二、空の神秘を知り、偉大さを知る。博士を得んとするならば、醫科は既に時期を過ぎた。永久に神秘である空の研究に冒頭して博士號を得る事が興味があると思ふ。僅かでも學び得た學識に依て、夜輝く星を神秘としてのみでなく、研究的に大なる興味を以て視る事が出来得る様になつた。かの火星生物生存論、それも星界研究に依つて得たるものである。是等は唯、學説のみでなく未來(幾百幾千年)に於ける、我等人類の生存方法に對する大なる参考であり、又知らねばならない事柄である。やがて來るべき地球上人類の生活難は、星界研究に依て、彼等に移住する事は、航空研究發達と相待つて至難ではない、必ずそんな時が來るであらうと思はれる。(K.K生)

K.K君はこれだけ堂々と述べて居られ、いかにも天界に興味を有せらるゝものと推察されるが、それにも拘らず第一、二、三問とも唯の一言半句も記して居られないのに驚いた。反問すそは

なんの所以であるかを。

三、自分は天文学を修得し(但し試験が零なるをいかにとす)天空の如何に廣く、如何に偉大なる力を與へてくれることを知つた。悲しい時にはあの銀月は何くれとなく、我等をなぐさめ、ある時は故郷の母を想はせ……。そしてきらきらと輝く数限りなき星は、清く且つ美しい。心の指導者として……。

そして又くされ果てたる盗人が一仕事してそして歸り橋を通るとき、その橋上に落ちたる自分の姿を見入り、そして自分を照す月を仰ぐとき、彼は二度と再び斯様な悪事をすまいと悔いるであらう……。その時もし月、星なかりせば、彼はいつまでもいつまでも悪事を續けるであらう。

嗚呼、偉大なる天空よ、月よ、星よ。

今自分達が万成山下の學び家で、お前達のことを書いて居るのが見えるだらう！だがお前達の與へてくれた、偉大なる教へは直ちに此の學び家に充ち充ちて居る。カンニングそれは針の先ほどの小さい事だらうな！

偉大なる力と、美しい詩とを與へ、我々生活を幸福に導いてくれる月よ、星よ……であることよ。

終りに先生の熱心に教導されたにも拘らず成績不良なるをお詫び致します。

(K.N生)

この感想文は、自然科学を離れて居る、しかし教訓の意が含まれ、親孝行な點は大に感ずべく、この盗人の様に月や星を見て改心して呉れ、結構である。この文には感じたが他の問題が至つて不成績であつたので、今少しと

いふところで、丁の成績である。親孝行の君は、第二學期には、十分勉強して母親に安心を與へなさい。

四、星界は廣漠なる空間とは知りながらも更に學んで驚かざるを得ない。天文学は人間日常生活に何等無關係な様に思つて居たが、緯度、經度の測定、氣候の變化層の發達をなして居る等、眞に研究することは重要にして趣味あることだと思つた。

僕は物理で磁石を學んだとき、日本の近くの地方に於ては、北磁極點に東からの方が近いにも拘らず、方位角が西方に變ずるとは實に不思議だと思つて居たが、先生から小磁極點が、シベリヤの北方に在るといふ事を學んで、僕はその疑問を解く事が出來た。僕はその時に眞に嬉しかつた。(T.Y生)

これは科學的によく出來て居る。人は疑問があつたときには、その事を常に心に掛けて置かねばならない。T.Y君が物理學の疑問を地理學で解決されたその心掛が嬉しい。余も永らく磁極の問題には悩まされ、十數年間解決に苦しんだものであるが、岸本元船長に質問して、漸くその疑問を解くことを得たのである。君よ總ての問題に就いてこの態度で勉強されたならば、將來の大成期して待つべしだ。教科書に計りとらはれての學習では進歩が遅いものである。

五、自分は五年生になつて、始めて天界の事を毎週一時間づゝ習ひ始めた。だがこの時間は面白い時間ではない。よくかういふ事をきく、即ちわからない時間の時

は面白くないとかいふが、それは成程その通りかもしれない、けれども自分は四年生までに習つた、地理即ち……地方には……を産すとかいふ地理には過分の興味と面白味とを以つて、毎週一時間の地理の時間を待ち楽しんだ。そして自分は中等教員になる目的を以つて居るが、その中でも地理の教師——事實のことなのです——にならうと——それは四年生までの地理時間に思つて居ただけけれども五年生になつて天界のことを習ひ始めてから、自分は地理の教師になるといふことは不可能のことではないかといふことを悟り始めた。何んとなれば天文學は面白くなく、又解き難いからです。この世のすべての現在の人々は「リアリズム」を主張する。これは尤なことである。僕も「リアリズム」——現實主義者だ。即ち四年生迄にならつて來た地理は即ち「リアリズム」なのだ。……地方には……が産するといふことは現實の事なのだ。決して疑ふ餘地のない問題であるが、天界のことは、ともすれば疑ひがちになる。それは餘りに現實より離れてゐるからである。北極には北極星があるとか、地軸が六十六度半の傾きを軌道面になし、自轉公轉の何ちらもするから、四季の變化があるとかいふことは——疑へばきりのないものだ。誰れも地軸を見たものはあるまい。北極星が毎日どんなに變化して居るかといふことは——恐らく誰れも見たものはあるまい。だから星學は面白くなくなるのだ。この世のものはあまりに現實主義なのだから。例をとつていへば人間には心といふものがあるといふ。だが誰れも見たものはあるまい——各自持ち

ながらも——しかしその作用はつかむことは出来るだらう——それでないと斷定すれば出来ないこともなく、あるといへばいへないこともないやうなものが星學なのだ——未だいくらも書きたいことはあるが、紙面に制限があるから——これで止めやう。(S.M生)

S.M君よ、地理科に興味を以つて居られたものを、第五學年で挫いた様です。併し何れの學科を問はず、研究に研究を重ねて行けば、不可解のことが澤山に出てくるものである。その時に負けては成功しない。不可解の點を如何にしても解く努力が必要である。不可解のことの出来るのは研究上喜ぶべきことである。星學は自然科學の妙所である。數學、物理學其他の科學によつて満足の解決に達するものである。余はこれ位「リアリズム」の科學は他にないと思つて居る。北極星、地軸、地軸の軌道面に對する傾斜、自轉、公轉等何れも現實のことである。にもかゝらずS.M君がこれを否定せらるゝは何故か、確固たる精神を以つて居らるゝ君にして、この言をなす、實に不可解である。今一步勉強せらるゝならば、氷解せらるゝ事を信じて疑はないのである。

六、星學を學習した後の感想を記せて、僕には感想なんか起らない。星界を學習して後夜の星を見ても、何れが遊星やら、恒星やら解けない。誰でも北斗七星だけはわかる。故に星界を習つても面白くない。一つも解けないのだから。夜の世界には星は多數ある。星の學を學んでも何

だい、實際に其の星を傍で見たのでなし遠くで光つて居る星を望遠鏡で見たて、五十歩、百歩の差のみだ。常識として星の事を少しは知つて居てもよいけれど、さう詳しく知る必要なしだ。

次に今日の問題に就いて少しく感想を述べやう。二番の問題は少し無理だ。無理といふこともないが、間違つて居る。何年は閏年か、平年かなんて、閏年、平年の意味さへ知れば、それでよいと思ふ。大正十二年は平年か、閏年かて、暦を見て知つてゐるものは、閏年、平年の意味が解からなくとも書ける。(Y.N生)

一事一物を観るのには、批判的でなくとはいけない。古人も書を悉く信ずれば、讀まざるに若かずといつて居るではないか。地理科に於ては、常に變動がある。天地も曾て以て一瞬なること能はずとか。げに陸地は嵩く峙ち、河長へに流れて一見、不變不動なるが如きも、其の實、常に内力、外力の間斷なき作用によりて、一瞬も變動を止むることなく、高低凸凹定まりなき現今の地形は、實に此の作用によつて成れるものである。地を離れて人なし、人を離れて事なしとかや。自然地理の方は人に目立つ様な變動は少いが、人文地理の方は、時々刻々變動して止まないものである。この點が地理の興味ある點で、油斷も隙もあつたものではな

い。こゝに活動性がある。世の中の事件は總べて、地球上に於いて起つて居る。最も天體、空間に起ることも多少はあるが。

第二問に對して、お小言を頂き誠に恐縮の至りである。併し平年か、閏年かは暦を見ればよいといふことは、解らない漢字は字書を見ればよいといふのと同様ではないでせうか。御一考を煩します。

参照、第二問、グレゴリウス暦とユリウス暦との異なる點を述べ、左記の年の平年か、閏年かを答へよ。

- 1, 明治三十三年(神武紀元二五六〇年)
- 2, 大正十二年。
- 3, 昭和七年。

——×——

感想の一つも書けない人もあつた。實に憐れむべきではないか。これは教授が徹底して居なかつたからだと思へば、實に恥かしい次第である。或は一、二行のものもあつた。前記六名の諸君は善かれ、惡かれ感想を以つて居られた事は、人意の強うするに足るのである。この様な試みも、生徒諸君に一つのショックをあたへるであらうと考へて、感想記の感想を述べたのである。

倉敷の名譽臺長より

拜啓、過日は御多用中御足勢被下、御蔭を以て好都合に參り、面目相立ち大度不過之、厚く御禮申上候。當日夕、岡山にての御陪食(大原氏參列)の節の御話にも出で候趣にて、御成の無意義に終らざりしを喜び居り申し候。(後略)

9年6月9日

原 澄 治